供犧の研究

上野專精
後藤覺禪
勝正雄

供犧の意義及價値

宗教を生きた事實として見る時に、之を宗教的表象と宗教的態度とに分ける事が出來る。而も宗教は單なる觀念的なもの卽ち表象に止るものではなく、それは必ず宗教的態度として何等かの形で行動儀禮として現れるものである。つまり宗教にはこの二つの要素は不可離の關係があり、宗教としては神々に就ての觀念と言ふよりも寧ろ神々と關係する行爲である。かゝる宗教の見方は宗教を神聖觀念とか畏敬の情操とかを以て定義せんとする機能心理學的宗教觀に於ては特に强調されて居るものである。故に宗教を研究するに當つては、その觀念的表象と共に行動的態度としての儀禮的側面の研究をも疎かにしてはならない。

然らばかゝる宗教的態度儀禮とは如何なるものであらうか。ジェームス（W. James）は之に犧牲と懺悔と祈禱の三つを代表的なものとして擧げて居る。私もその儀禮の中核を爲す根本的な要素は供犧と祈禱と懺悔等の自淨の行であると

思ふ。然しその身體的動作としては單に之等に限られるものではなく、禮拜の態度や呪術的作法をかへり見なければならないが、其等は一律に幾つかの項目に概括して見るには餘りに雜多であるが故に、それを傳統的に祈禱とか供犧の名で概括されて居るものにその性質と種類を要約して見て三つに分けたのである。祈禱と自淨の行とは別として、今茲に我々は供犧に就て少しく研究して見ようと思ふ。

供犧と言ふ言葉は歴史的に動物犧牲を中心とする諸現象に限られて居るが、供犧をそれのみに限つて見る事は出來ないのであつて、かゝる動物や人身の供犧の外に、亦廣く供物又は供進と言ふ物質の供犧もあるのである。宇野博士も供犧にはこの二つのある事を述べて居る。（註1）赤松博士もその著輓近宗教學說の研究の中に、供犧（聖供）には殺さるべき犧牲と殺害され又は滅却されざる供物の二種類のある事を強調してユーベルとモース（Hubert et mauss）が共に前者のみを供犧と解して居るのを批評してゐる。（註2）

一體供犧とか供進とか言ふ言葉は餘り區別して用ひて居らないが、嚴密に言ふ時には供犧は犧牲と同樣に動物犧牲や屠殺や其の聖化を主として意味し、供進とは種々の物質の供進を意味してゐる。食物其他の有用なる物品を神靈に供へる事實を省る人々は一般にその供進の方に重きを置いて供犧を解して居るし、動物犧牲を主として考察する人はその屠殺若くは廣い意味で破潰を供犧の根本的なものとしてゐる。そしてこの場合は供犧と犧牲とは全く種類の違つた儀禮となるのである。

然し之等は共に何等かの形で聖化が加へられるから同系列の儀禮として概括する事が出來るだらう。又高等宗教や倫

理的に發達した宗教に於ては動物や人身供犧は何等の意味も有せずして寧ろ倫理的に排斥されて居り、それは唯人間の內心よりの神への服從を象徴するに過ぎないのであるし、又供犧には主觀的供犧と言つて何等の犧牲も供物も有しないものさへ考へられる。故に供犧を一方的に解して動物犧牲のみ或は供進のみに限つて見る事は出來ないのであつて、兩者を同時に廣く供犧と見て行かうと思ふのである。

未開時代に於ては宗教は呪術的實利的であり非常に神話的であつた爲にその供犧の意義も幼稚であつた。宗教儀式を以て捧げられた食物は宗教的對象の食物となり、又はその生活を維持し之を享樂するに足るものとして、又はそれに依つて神聖なる對象と和合交通しかゝる神聖化された食物を會食する事に依つてその食物の聖質を獲得してその聖なる力を得ようとするのである。即ち其れを食ふものは其の神的力を受けて建康や幸福や强力を有すると信ぜられて居た。供物の大部分が食物である所から供犧は神人結合の共食儀禮と看され、神と會食すると言ふ一種のサクラメントSacramentの性質を有する。又トーテム動物の供犧のやうに、彼等の先祖たる神的動物の肉を食ふ事に依つて新しき生命と力とを得るとか、或は生のもの、新鮮なるもの、初獵、初穗等を捧げる事がある。之等は呪力觀說や生命觀說を結合して神秘的な生命や呪力の獲得又は轉移を意味するものであるとして居るが、之は亦單にそれのみではなく給與、祈願、感謝、贖罪等の種類を含み食物に依る神人の結合を意味すると同時に、自己に最も價値あるものを捧げんとする赤誠の發露としてのものもあり、之れは神靈への贈與、貴重なるもの喜捨をも含めての神聖なるものの提供と言はなければならない。寺院や神社の建築や神佛に香華、燈燭、其の他の裝飾物を捧げる事や、稻荷樣への鳥居や幟もこの意味のものであ

る。

一方犧牲と言はれて居る對象に向ふ供犧者とか使者とか言ふ意味を主とするものもある。

動物や人身の供犧はそれである。その供犧の意義も色々の方面から來て居るので一概にまとめることは出來ないけれども、神が人間と同樣に部下を必要とするとか、又は代償的に神の怒りを鎭める爲とかに依るものがある。我國の殉死の如き、又日本武尊の危機を救はんとして海に投じて海神の怒を和げんとしたその姫の物語等はその例である。其の他親子、兄弟とか處女の犧牲とか、又人柱と稱する橋とか建築物の基礎としてそれが將來多くの危險を伴ふ爲に、その多くの人の命の代難として一命を犧牲にすると言ふ事がある。又酋長とか國王とか言ふ個人の身代りとしてその病氣や危機を救はんとする事もある。

之等は原始的供物の意義とは異り、又拂淨の供犧等が說明されるから單に供犧の意味を呪術的なもの、即ち犧牲に依つて神性と融合せんとする事にのみ限つて見るよりは、かくの如く神靈への供進贈與の觀念を含めて見て居る事は認めなければならないが、供犧の種類を單にかゝる犧牲的供犧にのみ認める事は甚だ不當である。寧ろかゝる供犧は現代に於ては道德的に排斥されて來てゐる。

故に供犧とは神に捧げる供物と看し、それが尊敬、感謝、懺悔若くは誓約等種々の情意の表現であり、又神靈の欣喜、宥和或は幇助の何れかを目的とする事は勿論である。

然るに供物を神人の關係を新にし且つ確實にせんとする事の意味を有す事は勿論であるが、之をそれのみに限る事は

出來ないのであつ、前述の如くその外に神への捧物、罪の贖ひとしての意味も有るのである。卽ちそれは始め人間同志の間に爲された贈物の比類に依つて、或る時は請願の心持から或る時は感謝の念から、或る時は契約の條件として捧げられたものである。つまり供犧とか供物又は供進と言はれる現象も、その犧牲や供物の種類と意味に依つてその行動の目的と形式が非常に違つて來るものである。

宇野博士はその著宗教學に於て供犧の種類を敎へ呪術的供犧（Zauberopper）交換の供犧（Handelsopper）嘆願の供犧（BittoPper）尊仰の供犧（Huldigungsopper）贖罪の供犧（Suhnopper, piacular socrifice）授托の供犧（Hingebunsopper）感謝の供犧（Dankopper）誓約の供犧（Gelubdeopper）合一の供犧（Vereinigungropper）及び神靈を威赫、試練、幇助する供犧等を數へて居り、又祭祀に於ける身裝、持器其の他の裝飾や設備の大半も神靈への供進であるが、別の意味での聖化であると言ふ點よる或る程度まで供物と看す事が出來ると言つてゐる。（註3）

つまり供犧とは呪術的實利的効果を目的とするもののみでなく、寧ろ情緒的表現から起つたものが多いのであり、それには何等實利的な意味を有しない。卽ち宇野博士は亦供犧は人格的な神靈等に向つてなされるとのみ考へることは出來ない。强制、交換、嘆願、合一等の供犧は多く何等かの實利的効果を求める手段的のものであるが、贖罪、幇助、感謝誓約の供犧は少くとも第一次的には感謝や欲望の表出である。故に對人的意味をもたない對物的機械的な供犧や主觀的供犧の如き非對人的なものも少なからず含まれて居るのである。それは宗教が必ずしも實利的な目的のみに求められないと言ふ前提からは許されなければならない結論である。作物增殖の爲の農耕の供犧、家屋、橋梁、その他の榮造物

を保護開運せしめる聖化の供犧、トーテム共の他の神秘的呪力や生命を獲得する共食、聖餐の供犧、入團昇進の資格を與へる入川の供犧、汚穢不淨を拂ふ祓除の供犧、危難を回避する爲の代川の供犧、邪氣を防害する除害の供犧及び卜古の供犧試練の供犧等は神靈の力を待たないでそのまゝ供犧の意義を有して居る。その中でも除害の除害供犧、除祓代用其の他の禁欲的は單なる感情の表出たるに過ぎないものである。（註4）

故に供犧の意義を廣義に解する時には、動物供犧に限らず他の種々の物體の聖化、特に價値あるものの喜捨を前提として居り、提供、奉納を解するのが至當である。中には埋沒燒却其の他放棄排除がある。卽ち護摩をたくと言ふ如きはそれであつて之も供犧の中に數へなければならない。

結局供犧とは、チーレ（Tiele）の如くに、捧げられた供物、或は聖別された場所、物、神殿、人或は屠られた犧牲は勿論、更に進んで神を喜ばせなだめる爲に捧げられた一切のもの、喜捨せられたる一切の財產又は娛樂、斷食や禁欲の行宗教動機から起る自己否定、獻身の類、皆供物である。而も彼は續いて言つて居る。之等の後半のものは決して比喩的意味に止らずに、その最後のものは凡ての供犧の頂點であり拔群の供物であり、他は皆劣等の形式、假面、豫表である。最後のそれは決して單なる象徵としてではなく、誠心誠意に崇拜と共に爲す唯一の供物である、（註5）と。之れは少しく供犧の意を廣義に解し過ぎて居る觀があり、これには祈禱、自淨の行も入れる事が出來る。然し亦考へ樣に依つては事實其等も供犧的要素を有するものと言ふ事が出來る。例へば祈禱は、呪術的祈禱、商賣的祈禱、觀說的祈禱、懺悔の祈禱、歸命の祈禱等に分類されるが、大別して之を感謝の祈禱と願求の祈禱と爲す事が出來る。そして祈禱の純粹なるも

のは感謝の祈禱である。自己の實利的欲望の爲の願ひと言ふ呪術的なものから、御旨のまゝになさせ給へと言ふ倫理的精神的なものに進化するのであるが、此處に於ても祈禱を捧げると言ふ事は一種の供犧と考へられるものがある。その外自淨の諸行としての苦行、禁欲、懺悔、贖罪、遁世、修行等も同樣である。

是の如く供犧は宗教の儀禮的方面全般に渉つて居る。卽ち宗教的な氣分又は態度と言ふものの中には、超自然的要素が含まれて居るならば、必ず供犧的氣合が出て來なければならないと思ふ。從つてその意義も時々處々に於て複雜して來るのは當然である。

供犧の行事は原始及び古代に於ては、物質的動物供犧が多く而もそれは呪術的であつたが、宗教が發達すると共に益々複雜になり且つ精練されて提供的赤誠の表現と言ふべきものや精神的主觀的供犧となつて來た。又道德的觀念が發達するにつれて、動物や人身の供犧を無用とし、或は神はそれを求めないと言ふやうになり、次第に少くなりその代り赤誠のほとばしりとしての精神的なものが多くなつた。

舊譯聖書創世記に、アブラハムがその子イサクを神に捧げやうとした、その時神の命として羊を以て換へたと言ふ例があるし、(註6)我國に於ても殉死の風を埴輪にかへた事實がある。又詩篇には「なんじ、そなへものをこのみたまはず、もし然らずば我これを捧げんなん、ぢまた燔祭をも悅び給はず、神のもとめ給ふ祭物は、くだけたる靈魂なり」と言つて居る。(註7)又ジエームスも次の如く言ふ。「神々に犧牲を捧げる事は初代の崇拜に遍し渉つて居る。然し儀式が上品になるに伴ひ、ものを燒いて供へる事と牡羊の血を流す事とはもつとも靈的な性質の犧牲の爲に廢されて來た。猶太

教、回教、佛教は犧牲を獻げる儀式をせずに進んで居る。基督教も亦この觀念がクリストの贖罪の秘義の中に變形して保たれて居る事だけを除けばやはり犧牲を供へる儀式をせずに進んでゐる。之等の宗教は凡て此等の空しい供物の代りに心を獻げる事、內なる自我を拋つ事で補つて居る。回教、佛教、古基督教が奬勵した禁欲苦行では、この種々の犧牲こそ宗教儀式であると言ふ觀念が如何に不拔なものなるかを私共は見る」と。(註8)

卽ち供犧の意義は文化の開けない時代に於ては魔術的又は實利的意味に解されて、神の怒を和げる爲とか、願を叶へて貰ふ爲とかに利用されて居たのであり、供犧の種類も非倫理的なものが多かつた。然しそれが發達するにつれて只赤誠を以て捧げる事となり、必ずしも物質的なもののみに限らず主觀的精神的な供犧が要求された。玆に至つて宗教的態度として又宗教意識としてはその頂點に達したものと言はれるのである。供犧に於て最も純粹なるものは、それに依つて實利的効果を求める事ではなくして、我々の宗教心の自然の發露として、その効果を全々忘れてしまつた所に、唯心から神に捧げると言ふ意味である。

故に供犧の原始的意味から見てのみ、その宗教的價値を否定することは出來ない。供犧の意義は決して魔術的な所に存するものではない。之れは宗教の能度的方面に屬するものであり、宗教には必ず伴ふ現象である。宗教的對象として表象されるものは何等かの意味で自己以上のもの、寧ろ自己以外のもの、全く他のものとして神秘的、威嚴的存在である。それに對する自己の態度は或は被造物感として、服從し、妥協し、又は排除する爲に供犧的行爲を爲すのである。供犧は當に亦松博士の言はるる如く神と人との媒介者であり、宗教心の必然の發露である。玆に供犧の宗教的意義もあ

り價値も存するのである。

註1、宗教學　二九四頁參照
註2、下編　三六〇頁參照
註3。宗教學　二九六頁參照
註4、宗教學　二九七——二九八頁參照
註5、宗教學原論　參照
註6、創世記　第三十二章一節——十三節
註7、詩篇　第五十一章十六節——十七節
註8、宗教經驗の諸相(比屋根安定釋)六二九頁參照

原始時代の供犧

供犧とは意義及び價値により述べし如く、神聖なる存在者卽ち神に對する寄與であつて、救濟を神に求める態度である。オーストラリヤ人が死人の墓所に供物を捧げ亡靈を喜ばせ、惡事をしない樣にするのは、亡靈が死後其種族に對し惡事をするといふ見解から來てゐるのであつて、靈魂の欣喜、慰撫、或は宥和の供犧とみることが出來る。オーストラリ

ア・ニグロが狩獵の場合神より報酬をうるために供物を捧げるのは交換或は誓約の供犧と見ることが出來る。彼等はその供物に對する報酬をもたらすことを豫期して供物を捧げるのであつた。野蠻人は彼等の捧げた犧牲に對したと同樣の報酬を要求するので「此處にあなたの好きな食物がありますが、さてその代りに私が今日一匹のカンガールを獲ることの出來る樣にして下さい。さうしたらあなたに、又何か捧げます」(註1)と言つて供進するのである。

又フロリダ(ソロモン島)の土人は「御先祖の大蛇樣、出て來て下さい。此處に在る犧牲の豚をみて下さい。あなたの分前を食ひ取つて敵との戰に際して私を助けて下さい。私達が豚から取るものを犧牲としてあなたに捧げやうと思ひます。私達があなたのものであり、あなたから出て來たものであると同じ樣に、それもあなたのものでせう」(註2)と祈願するのである。これは嘆願、幇助の供犧であつて神の助力をうる爲の供犧である。

聖餐の儀式の際、アラビヤ人は駱駝を犧牲として供へ、又或種族では綿羊、或は羊を用ひ、ポリネシヤ諸島では動物犧牲のみではなくあらゆる供物を種族全體が分配して食し、シベリヤの種族中では聖餐の血肉を病氣治療に用ひるがこれらは等しく神と種族の間の神人交通の一樣式である。是を血の契約とみることが出來るのでこれより種族の團結性を益々強めて行つたのである。後にこれが贖罪觀念の發生となり動物の死をもつて贖罪の供犧とする樣になつたのである。

原始宗教に普く存する舞踏も供犧の一種とみなすことが出來る。卽ちアメリカ・インデアンの死者の靈前に於ける舞踏、日本では天岩戸神樂、ギリシヤのディオニフス密儀等は靈魂に對する慰安、宥和、冥福、嘆願のために爲されたものである。又そうした行爲中に神秘的な陶醉に入り神の啓示を傳へるのであるとも解されてゐる。

各未開民族の供犠の形式を見るに、アフリカ種族が祖先ウンクルウンクルの祖廟の周圍に木を植えて守護し、人身供犠等の供物を捧げるのは祖先に對する尊仰の念より發した供犠である。バンツウ種族中のアチェワ族は像の中へ死人の靈魂を封じて、これに犠牲を供へ人を呪詛する。アエムバ族では神に犠牲を獻じて病魔退散させるに讓符を用ひる。アンゴンクイン種族においては人々が相會して宗教的舞踏を行ひ、タバコの煙や料理の匂ひを神に供し、又斷食したり潔齊したりして部落の稱とする動物に供物を獻じておのが部落はこの動物より發生したと信ずる所の動物に對して絶對的尊敬を拂ふのである。

メキシコ種族においては農作の豐饒を祈るに玉蜀黍神センテオトウルに玉蜀黍の莖を置いて祈り、種を蒔く際にはトクテを崇拜し、農作物の生々發育を希ふに日神、月神、雷電の神を崇拜するので、これはその神々は人々に萬物を與へ、又罪惡を罰すると信じてゐて、神々の好意を迎へ宥和のため祈願し犠牲を供へるのであつて人々は其年の祭儀の費用の分擔義務を負はされ、神々への供物として生祭、燔祭時には囚人を人身御供として捧げられる。南アメリカのインカ王族においては、耕作、種時の時節には收穫のある樣にとて神々に祈願し犠牲を獻ずる。その供犠としては獸・玉蜀黍を供へたが時としては戰虜を犠牲としたり、又自分の子を人身供犠とすることさへある。雨の候には病魔を追ひ拂ふ意味から河流において祭司以下百人の戰士が禊祓され、風を祭祀する時には贖罪の節會が催され、主要神を祭る時には青年に難行苦行をさせ、農作の成熟を祝ふ月と新火を太陽の祭壇に點ずる月もあり、又收穫が初まると創造神と太陽神に玉蜀黍を供物として獻ずるのである。

ポリネシア諸島においては人の死は神々の憤怒を招いたものとして、衣　豚、食物を神に献じ宥和し死者の更生を希ひ努力するのである。又タヒティイ島やソサイエティイ島では死者への供物として己が生血を供へたり又來世の生活が現世の生活と同じ様にといふ考へから　死者の衣、手道具を初め死者の所有物全部を死者と共に葬る風習が存してゐるのである。又諸神靈を恐怖する所より宥和を希ひ、指導、守護を求めん爲供物をしたり吉凶を卜するために呪術修法をなし神慮を招いたりした。

インドネレア種族は死者は現世に執着して離れないといふ見解より、その憤怒から脱れるため祭儀を設けてあらゆる方法をもつて死者に己の姿を認めさせない様に努力するのである。もしも地位のある人が死んだ場合においては、死者の靈魂を滿足させるために人身御供の風習が行はれるのである。又死者の裝飾品の如きは死者より外には用なきとして最初に供物として供へた。メラネシヤ種族においては調理した食物や檳榔子等等を神々に献じ、又死者にも食物を供へそれが腐敗するまでおいてそを下げて人々は分ち食ふか或は燒き盡すのである。ソロモン島では豚を献じ、やはり人々はこれを食する。マラ島では供物の動機を七種に分ち、(一)航海より歸つたものは、父の形見を收めた箱の前に食物を供へ、(二)靈的存在の意志に逆つて、農作が不作になつた時は豚を犧牲に供し、(三)秡ひの時豚か犬を殺して供へ、これを海に投ずるか、靈的存在の訪れる場所に置く、(四)病人が出來ると豚か、犬を調理して、祖先の靈に供してこれを宥め治療を圖る。(五)(六)(七)は初物の贄で、これに關聯した諸神に供へる。最も神の宥和をうるには人身供犧で時々行はれ祭の折人肉を燒いて殘りを人々が勇氣をうるために食する。

シヤアマン教においてはシヤアマンは神々に犧牲を供へ、諸神諸靈と交通するので、持つてゐるタムバリンの中へ諸神諸靈を集め、シヤアマン自身は沒我入神の境地に入り、そして氣候や農作物の模樣をきいたり、或は吉凶をトし病氣は諸靈の仕業であるからとて病人のうちに潜んでゐる所の諸靈に修法をなして靈魂を呼び出し犧牲を供して諸靈を游離させるのである。これは我が國の御嶽教に於ても矢張りこれによく似た修法をする。病人の模樣をきいたり色々の事を呼び出した神に尋ねるので神の地位の高ければ高い程沒我入神が激しい。神の還つて後は死人の如く昏絶してしまふのはシヤアマン教の修法と殆んど同じである。バビロニヤの宗教において供物には食物、飲料を神に奉り、又は馨しい香を神に嗅がせるので、人間を神に供へる代りに動物犧牲を用ひてゐるのであつて動物犧牲には羊、山羊、去勢牛、魚、鳥、動物以外のものでは穀類棗椰子の實、無花果の實、水、油、牛乳、酒、蜜で香料は杉、イトスギ、桃金孃、麥粉等で供物は殆んど祭司が食してしまふので、牲物を燒く風習は贖罪や呪術の儀式にのみ關連してゐる樣に思はれる。

ギリシヤにおいてはその供する對象たる神により祭りの形式は異るが供へものに用ひられたものは動物犧牲、菓子、果物、禾穀等である。動物犧牲は二種に分れる。一は神が犧牲を收め祭司も後足の部分を領して後、肉を聖餐に食する二は犧牲を全部やき盡してしまふのであつて死者や神々を祭る時か贖罪の時になされる。前者は感謝の供犧の時行はれる。ロオマ宗教においても農作物を供へる事が多くパン、菓分、蜜、果實、牛乳、乾酪等を供し動物犧牲としては豚、羊、又は清潔なる家畜家禽が用ひられたので、例へば四月十五日にカピトル岡に姙娠した牝牛を供へテルルス神を祭るのは農作物の豐饒と家畜の繁殖を祈つたものである。とに角種族の神々は地に豐饒を賜ふ神であるため、人々は收獲時

神に喜んで供物を捧げ身も心も神のものだと信じセム種族が神を王、王女、主人、女主人と呼び人身供犧をなし小兒、女子の節操を神の犧牲としてゐるのである。又聖娼といつて娼婦を神に奉仕せしめる風習がカナン、シリア人の間にあつた。

以上各種族の供犧の形式方法をみるに多少そこに異同はあるとしても究極の目的は人間の必然的要求である生命の問題である。原始民族において生命の最大價値は自己保存であつて、これはとりもなほさず種族保存の本能と合致してゐる。これは換言すれば食物の獲得も生命の最大價値であると言ふことが出來る。此生命の最大價値なる所の食物を神に献ずることにより神の恩寵をうけ、より大なる生命の獲得に努め、此宗教的態度の一形式が供犧である。

註1、宗教及信仰の起源(玉城肇譯)五四頁參照

註2、　同　　同

世界宗教史(比屋根安定著)一三一——五一〇參照

供犧の意議及び價値は前文に詳述したるを以て反複することを避ける。この供犧の佛教内に於て觀んとするには古代印度の宗教に於ける犧牲より考察せねばならない。梨俱吠陀第十卷詩十五には

吾はいと親き父達の、毘紐奴のうみのこバルヒスに在りて、いきにへの杯を上ぐるものみな、現し世に來りおとなふもの、バルヒスに在る父達よ、吾等に救濟を與へたまへ、吾等のすゝむる犧牲の杯を召せ、そを味はひ、吾等に惠を垂れさせ給へ、やぶさかならず幸福と威力とを與へ給へ。

神に對する哀求は一にバルヒスなる供犧を以てする。原始宗教に於ては動植物の生命供犧が最大なる祭祀であり從つて中心となつた。

而もこの様な單純なる犧牲提供の形式は佛教となつて、卽ち教祖釋尊に依つて如何に處理清算されたものであらうかこのいさゝかを記述するのが本章である。

禁欲及び行の如き禁欲として箇條に示されたものは律に詳しい。

行の如きはその一々を擧げるに遑なき程であるがその二三を例示すれば、看經、念佛、寒行、坐禪等皆この中に含まれる。かうした供犧の甚だ洗練されて、從つて形式化されたものは密教に多く見ることが出來る。

禁欲修行の外に捨身命の如きはこれを民間信仰史上に求めるならば隨處に見出し得るもので茲に改まつて說く迄もない。

吾等に最も親しき香華燈燭茶菓珍膳の奉献も勿論供犧と見做さねばならぬし迷神化した水天、不動等の信仰もその第一は供犧の問題が先行する。

佛の崇拜より轉化して諸天乃至自然現象への讃仰は請雨、尊星、北斗供、施諸餓鬼、止雨法、法花法に現れてゐるし益々土俗化して、龍傳說や鬼神傳說の如きも、その中に供犧の若干を見ることが出來る。

佛教內に於ける供犧は印度古代に於ける單純犧牲ではない。教祖によりて淸算されたるものであることは前述の通りであるが、その犧牲提供が全然無くなつたのではない。種々なる形になつて分化して來てゐる。今二三の例を擧げたの

は、ほんの九牛の一毛にも足らぬもので、これを以つて佛教の供犧を說き了せるとは決して思つては居ない。

兎に角、佛教に於ける供犧の問題は今まで學者によつて少しも手がつけられて居らぬことで、このことは將來に興味深く考へられる問題なることは確かである。